

# 柿生文化

平成20年10月16日  
川崎市立柿生中学校  
郷土史料館情報・研究誌  
第3号

## 先人の思いを感じながら

—— 柿中、旧正門前階段を踏みしめて ——

柿生中学校長 板倉 敏郎

本校は、現在、平成22年春の完成をめざして、新校舎改築の工事が進んでおります。生徒も職員も、これからしばらくの間、今までのバス道路側にあった坂道を通れずに裏側の昔の旧制小学校時代からの階段の山道を通ることになりました。

私も夏休み中から、練習も兼ねながら裏の山道を登るようになりましたが、134段(昔は125段であつたらしい)の階段を登ることは運動不足の身にとっては容易なことではなく、途中で2回ほど休憩をとらなければとても頂上の学校に辿り着けませんでした。それでも最近では、なんとか慣れて、休まずに登れるようになりました。

階段の半ば頃に大谷石でできた古い階段があることはお分りのことと思いますが、この階段は各段とも中程がすり減って窪んでいます。本校の敷地は、かつては柿生小学校と併設されていました。この地に学校が出来たのが明治35年(1902年)ですからその当時からある階段だとするともう100年以上も経っているわけです。毎日、毎日、雨の日も雪の日も子供たちが下駄や草履でこの階段を登って登下校する姿が思い浮かびます。岩石がすり減るほどの歳月が経ったと思うと感慨深いものがあります。

この階段を登りきってグラウンド方向に向いたとき、右手には、奉安殿(鎌倉、天皇陛下の写真や教育勅語を大切に保管していた施設)が左手には二宮金次郎(小田原の人で江戸時代後半、荒廃した農村や藩の建直しに功績のあった人物)の像があつたそうです。そこを通過すると小学校の校舎がありました。

当初、柿生には尋常小学校(旧制の小学校で4年間の就学、後に6年間となる)のみで高等小学校(尋常小学校の後、4年の就学、後に2~3年に変わる)はありませんでした。明治32年に柿生に初めて、高等柿岡小学校が修広寺の入り口付近に設立されました。やがて手狭となり明治35年(1902年)下麻生の白井義胤(うすいよしかね)氏の援助により今の柿生中学校のグラウンドの位置に高等義胤(よしかね)小学校が建設されました。

太平洋戦争終了後の昭和22年(1947年)新制の柿生小学校と柿生中学校が同じ敷地に同居するようになり、昭和34年(1959年)柿生小学校が現在の片平に転居し、今日に至っているわけです。

現在、プレハブ校舎の職員室の窓からは、郷土史の見学地にもなっている「教育の森」が見えます。右側は柿生小学校の「思い出の丘」が、左側には「白井義胤報恩碑」と「白井錠次郎先生頌徳碑」など柿生の教育に縁のある碑が見られます。

石階段を踏みしめるたび、先人たちの教育に対する熱い思いと子供たちの元気な姿が脳裏に浮かんでまいります。



昔の正門への階段道

## 「麻生の古環境」

昭和59年、麻生水処理センター建設現場から、多数の巨大埋没樹、植物種子、そしておびただしい数の大型貝化石類が発見されました。現地は通称「白根耕地」と呼ばれる柿生では一番広い八町八反の水田耕地でした。

私も工事現場を何度か訪れましたが地表から4~5メートルの所に炭化した巨大樹木が折り重なるように埋まっており、施設が建つところは、ほぼ垂直20メートル余りに掘り下げられ、幾段かの地層のなかで青灰色の層からおびただしい数の貝類を見ることができました。聞くとこの青灰色の層は「柿生層」と呼ばれ、三輪・栗木・黒川・万福寺等開発現場に見られ、約100万年前に堆積したと推定されるものだそうです。



発見された貝化石 (青少年科学館蔵)

埋没樹の発見は予想外のことで、多くの人々を驚かせましたが、それでは、これ等の巨木はいつ、どうして此処に埋まったのでしょうか。

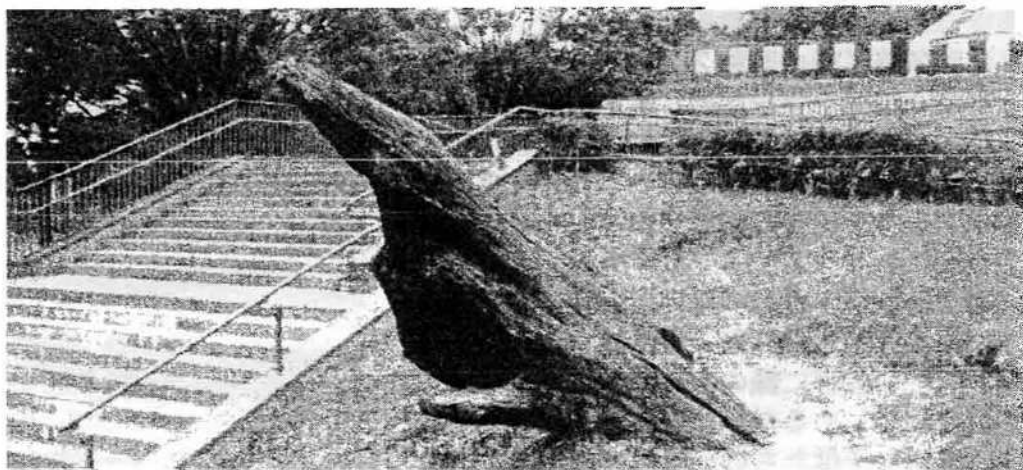
現地（白根耕地）の地形を見ますと、3方を丘に囲まれ、鶴見川・麻生川・眞光寺川に接した低地（海拔33メートル）です。原始時代以来、現、鶴見川水系の源である平尾・金程・万福寺・上麻生等の山野は、侵食、崩壊、洪水、氾濫の繰り返しだったと思われます。古麻生

川や片平川の強い河川力が白根耕地に4メートル余りの堆積層を造ったのではないのでしょうか。そして、それは、1万年前からと推定されております。

1万年前というと旧石器時代から新石器時代（縄文時代）へと変わっていった時代です。埋没樹は2~3000年前のものとして推定されます。そうしてみると、この埋没林は自然流出のものか、人為的作業が加わったものか謎が生じてまいります。

(市調査報告書参考)

(文：麻生区観光協会会長・元市議会議長・元柿の実効課課長 小島一也氏)



(麻生水処理センターの埋没樹木)

第9回 柿中カルチャーセミナー開催される

テーマ「

石造物にみる柿生地区の

9月18日(木)

於：柿生中学校

中世から近世の姿

講師 郷土史家 中西 望介 氏

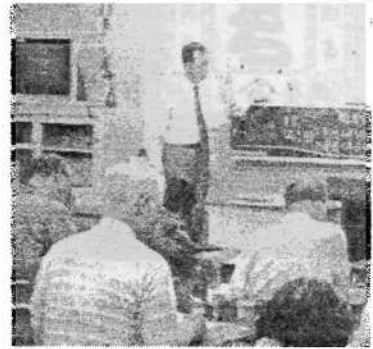


(岡上から発見された板碑)

今回のカルチャーセミナーは、郷土史家であり、現在、西高津中学校で教鞭をとられている中西望介先生をお招きして鶴見川流域の板碑(いたゞ)についてお話をいただきました。

板碑は、鎌倉時代から戦国時代にかけて造られた平らな石(板石)を利用して造られた供養塔で柿生にも多く発見されています。

今回は、板碑の起源や意味、原材料の岩石の生産地、各年代の特徴、等を考えながらこれらの「板碑」から判る各時代の背景や様子についてご講演いただきました。最後は、皆さん方より多くの質問が出され、大変内容の濃いセミナーとなりました。



(講演される中西先生)

た。

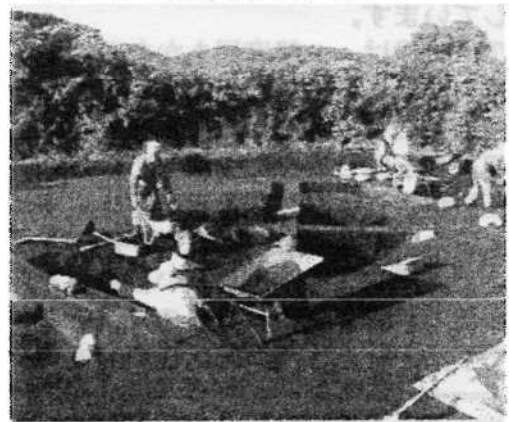
当初、会場を会議室と考えておりましたが教職員以外でも30人以上の参加者があり急遽、会場を一般教室に変更させていただきました。

早野上ノ原遺跡発掘調査

生徒見学会のお知らせ

現在、麻生区早野の戒翁寺横で縄文時代後期(約4000年~3000年前)および奈良~平安時代(約1300~1000年前)の集落遺跡の発掘調査が行なわれています。今後、旧石器時代の遺物が発見される可能性もあるようです。

この度、川崎市教育委員会のご好意で生徒を対象として下記のように遺跡の見学および説明会が開催されます。きっと私たちの祖先の生活の様子が立体的にわたしたちに迫ってくるものと思われま



(発掘作業の様子)

- ◎期 日 平成20年10月18日(土) 午前10時より11時
- ◎集 合 ・午前9時45分 ・早野聖地公園事務所前
- ◎服 装 本校制服あるいは、学校のジャージ



# 史料館収蔵品紹介

じんこうき

## 「じんかうき」(塵劫記) (吉田光由 著) 江戸時代初期



この書物は、日本で最初の算術書(現代の算数・数学二日本のものを和算という)で、寛永4年(1627年)吉田光由が著したといわれています。中国の数学を日本に適應するように改めた平易な入門書です。なんと明治時代末まで出版されており約300種が刊行されたそうです。内容は、大小の数や計量単位の名称、ソロバンによる掛算・割算を図解し、更に両替え、利子の計算等々日常生活に必要な諸計算を丁寧に説明しています。

江戸時代は、一般庶民もかなり和算に興味を持っている人が多く、難問を出しあって競いあうこともよく行なわれており、和算の好きな人は、自分の発見した問題や解法を絵馬にして神社などに奉納することがよくありました。ちょうど現代の「将棋」「囲碁」と同じような雰囲気で行なわれていたようです。

江戸時代も中期になると和算の大家である関孝和があらわれ、高度な方程式を始め幾何学などかなり高度な数学が研究されるようになりました。そのレベルはこの当時では、世界的にもかなり高い位置にあったと思われます。

本校で収蔵されているものは、初歩的なもので寺子屋で一般的に使用されていたものです。出版は、江戸時代後期のものです。

### 編集後記

現在、早野で調査されている遺跡は、旧石器時代から平安時代までの大変な長期間に渡る複合遺跡です。今後、この遺跡の研究に携わっている研究員の方にカルチャーセミナーの講師をお願いする予定です。時期は年明けとなりそうです。遺跡の一般公開は11月初旬の予定とのことです。